

熊本・益城町東無田集落 復興まちづくりプロジェクト

2018. 02. 13 発行 No.5

熊本・益城町東無田集落にて、 第四回「まちづくりワークショップ」が開催されました。

2018年2月11日、熊本県益城町東無田集落で、住民の皆さん、熊本県立大学、中央大学による第4回目となる復興まちづくりワークショップが開催されました。これまでの3回のワークショップをふまえ、今回は、「集落の中心につくり出したい公園のデザイン」、「集落全体のコミュニティのあり方」、「交流」の三つのテーマに分かれて話し合いを行いました。

「公園デザイン班」では、普段は子どもからお年寄りまで、すべての世代の人々が集まることができ、災害時には避難所として機能することのできる公園のデザインを提案しました。例えば、公園の芝生広場は、子どもが駆け回ることのできる広場として利用されますが、災害発生時には、テントを張ったりすることのできる避難場所として機能します。また、公園内に設置されるベンチは炊き出し等に利用できるかまどになるもの、電灯はソーラーパネルでの発電が可能で停電時にも明かりが灯るものとなりました。震災の経験を活かしつつ、みんなが幸福を感じることのできる公園という、復興と福幸（ふっこう）の意味をこめて、公園の名前は「ふっこうえん」としました。

「コミュニティ班」では、まず、東無田集落で行われているお祭りや行事について話し合いました。江戸時代から続く伝統ある行事や、震災後にはじめた夏祭り、集落内外のスポーツ大会など、1年を通してさまざまな行事があることが明らかになりました。行事の中には、集落内の組が持ち回りで担当してきたものや、その行事の意味をみんなで確認してからはじめるもののように、柔軟にかたちを変化させながら伝統を引き継いでいるものが多くありました。しかし、行事に参加する人は年々減少しており、その行事を知らない人も多くいるという問題点があることもわかりました。そこで、

「住みたくなるちょうどいい田舎 東無田」

というテーマのもと、人々の関係性を深め、伝統を継承し、東無田集落の新しいブランドを確立することによって、魅力あるまちづくりをしていく必要があると考えました。



住民の方々と議論をする石川教授



住民の皆さん、熊本県立大学、中央大学からたくさんの方々が参加しました。

「交流班」では、まずこれまでに住民の方々が行って来た、周辺地域や日本全国の団体との交流実績を振り返り、課題について話し合いました。そして、今後さらに交流を育んでいくために東無田集落で新たにやっていきたいことを、「ふれあい 体験 東無田」というテーマのもと整理しました。例えば集落内の公園に、新たな拠点を作り出して、被災地を案内するスタディーツアーの集会場所や、郷土料理の食堂、常設の野菜直売所として活用していきたいといったアイデアが出されました。

公園デザイン班、コミュニティ班、交流班それぞれの提案を発表したのち、全員でディスカッションを行いました。財政上の問題や、公園の維持管理の問題など、さまざまな問題点が挙げられましたが、一歩ずつ着実に復興に向けて進んでいくことの重要性が確認されました。また、今回の三つのテーマをそれぞれのテーマ内で完結させるのではなく、クロスオーバーして今後の展開を検討していくべきという点も共有されました。今後はワークショップで出されたたくさんの提案の中から、最初の一步として実践できるものを検討していくこととなります。これからも、環境デザイン研究室では、東無田集落の復興を支援していきたいと思えます。



コミュニティ班：
人々の絆をふまえた集落の在り方を提案しました



住民の方々の意見に耳を傾ける森田さん



公園デザイン班：住民の方々と創り上げた公園デザインの模型



交流班：集落外からの人々を惹きつける新たな拠点が提案されました



住民の方々と話し合いながら模型作成をおこなう鎌谷さん



井戸、ソーラーパネル、庭園、生垣など、公園のイメージがふくらみました



住民の方々と議論する根岸研究員